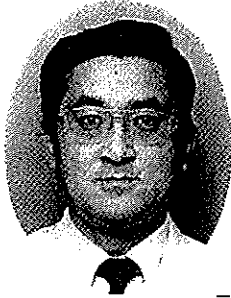


巻頭言



Gottron の sign

三 橋 善 比 古*

学会で皮膚筋炎の報告をきくと、Gottron の sign という表現をしばしば耳にします。指関節背面の（通常は）紅斑のことで、皮膚筋炎に特徴的で診断価値があるもの、という意味で使われているかと思います。その診断学的意味を云々するつもりはありませんが、私の場合、多少こだわりをもちながら聞いています。

皮膚筋炎の患者が診察室に入って来てS教授の前に座った。教授の周りには30名ほどの教室員が集まり、教授の言葉を一言も聞き漏らすまいと真剣に耳と目を凝らす。主治医が立ち上がりアナムネーゼを読みあげ、経過を説明する。主治医の口上は次のようにはじまる。“Herr Professor S, meine Damen und Herren, ich möchte die Patientin, Frau A., vorstellen. (S教授、そして紳士、淑女の皆さん、患者A夫人をご紹介申し上げます。)” ぼそぼそ口のなかで言う人はおらず、若い人も実に朗々と述べるのが気持ちがいい。1週間に2回行われる総回診の一場面である。場所は Zürich 大学の Dermatologische Klinik の一室。ひと通りの診察が終わった後、私は“患者は Gottron の sign を持っていますね”と、指関節背面の紅斑を示しながら聞いた。“いや違うよ、Dr. Mitsuhashi”, S教授は意外にもこう続けた。“Gottron の sign はそこではなく、前腕尺側の紅斑のことだよ”。

昭和60年から2年余りスイスに留学させて頂いたときの一幕である。

語学力不足のために、誤解した可能性もあるかと思い、もう一度同様の機会があった折に、S教授は確かに上記のような考えであることを確認しました。その後忙しくなり、そのままにしておりましたが、気になっていたので、今回この巻頭言を書くのを機会に、内外の代表的教本を調べてみました。まず手始めにわが国のものから始めました。現代皮膚科学大系（1984年発行）では、「指関節背面に認められる限局性の紅斑は Gottron sign とよばれ、皮膚筋炎に特異的で診断価値がある」と記載されています。このへんが現在一般的に受け入れられているところかと思えます。しかし、1972年発行の基本皮膚科学では、「四肢の関節背面に浮腫性紅斑が生じる」との記載がありますが、指については特に強調されておらず、『Gottron』についても触れていません。少し古いところで、日本皮膚科全書（1955年発行）では、「局所的萎縮斑が指背あるいは足踝部に発現することが多い」と書いてありますが、『Gottron』には触れていません。

次に、米国の教本をみると、Fitzpatrick et al. の Dermatology in

* Yoshihiko MITSUHASHI, 弘前大学, 皮膚科学教室, 講師

General Medicine (1987年版)では、「紅斑性の鱗屑をつけた斑状丘疹状発疹」が「指関節背面、肘部、膝蓋部にみられるときには Gottron's sign と呼ばれる」と記載し、指以外の部位も含ませています。Demis の Clinical Dermatology (1986年版)では、「約3分の1の症例の指関節背面に Gottron' sign が生じる。紅色の表面平滑な丘疹で、次第に萎縮性となり、次いで血管拡張と色素脱失を生じる。」となっていて、指に限定し、紅色丘疹であって、それが変化してゆくところまで含めて考えているようです。

英国の Rook の教本 (1986 年版) では、「爪根部、指背および指関節背面に青紅色の斑が生じる」との記載がありますが、『Gottron』とは呼んでおりません。

さて最後に、Gottron und Schönfeld の教本 Dermatologie und Venereologie (1958年版) の Dermatomyositis の章 (著者: Scheuerman u. Hornstein) をみると、Heuck-Gottronsches Zeichen (Heuck-Gottron's sign) というのが出て来ます。このものは「石膏のような白色、あるいは陶器色をした、やや陥凹した萎縮斑で、指関節背面と指背にみられ、このものは「モルフィアや白点病を思い起こさせるものである」と述べています。どうもこのへんが Gottron の sign のルーツのようですが、かなりニュアンスが異なるものになったようです。なぜなら、同じ部位の紅斑については別のところで言及していますが、他の部位の紅斑と列挙して書かれていて、特に強調されていないので、この部位に単に紅斑が存在していることではなく、脱色素性の萎縮斑になった状態をいうものと理解されるからです。ただし同様のドイツ語の教科書でも、Korting の Dermatologie in Praxis und Klinik (1979年版) では、Heuck-Gottron-Phänomene と名称が変わり、その意味も、「血管拡張を伴う爪囲の紅斑および指関節背面の萎紅色丘疹」を指すものとなっています。

現在我が国で使われている Gottron の sign の意味は、Heuck-Gottron の sign が拡大解釈されたものではないかと推測されます。わが国で用いられるようになってからの歴史はそれほど古いものではなく、最近15年ほどの間で、ドイツからの直輸入というよりは、米国経由で来たもののようです。また、その意味するところは厳密に定義されているものではなく、各教科書によって相違があることがわかりました。

これからは国際学会も多くなり、臨床例についても各国の皮膚科医と討議する機会が増えてくると考えられます。研究分野では用語の定義が比較的明確ですが、臨床用語はどうでしょうか。ひとつ点検してみる必要があるように思います。

S教授の言葉の、「前腕尺側の紅斑云々」については未だに 出典を 捜せず にいます。今回調べたことをS教授に報告し、伺ってみようかと思っております。

“Gottron の sign とはこれのことかと、Gottron 言い”

(平成元年3月10日)